

## 主の降誕 夜半のミサ

ルカ 2・1-14

2021.12.24

カトリック高円寺教会 18:00

主任司祭 吉池好高神父

今晚、このような中でわたしたちはクリスマスを迎え、このミサを捧げています。テレビなどを通して伝えられるニュースを見るにつけても、先行きの見えない、いつまでも続く、終わりが無いこの苦しみの中で世界のたくさんの人々がこの苦しみを迎えています。この先どうなるのだろうか、自分の家族は、自分は、身の回り的人々は、いったいどうなるのか。伝えられる様々なニュースを見るにつけても、わたしたちはこの中で希望を持ち続けることができるのだろうか、心苦しくなって、もうテレビのスイッチを切ってしまいたい、もうテレビは絶対見たくない、そのような日々をわたしたちは過ごしています。

そのような中で迎えるクリスマスが、わたしたちにどのような意味があるのか、そのように思わず問わなければならないような気持ちにもなります。

クリスマスの喜びは、今日のルカ福音書の中に語られているように、天からの大いなる光の中で、夜通し羊の番をしていた羊飼いたちが最初に聞いた天からのメッセージです。この世からは決して沸き起こっては来ない、天使の神様を賛美する大いなる歌声の中で、このクリスマスの最初のメッセージは伝えられました。天からのメッセージです。この世の中では見出すことができない、耳を傾けることができない、そのようなメッセージです。

羊飼いたちは、この天からのメッセージを心を開いて受け取りました。天使が告げたようにベツレヘムにお生まれになられたという救い主を探しに彼らは出かけて行きます。そして、まぶねに横たえられて眠っている幼子イエスを探し当てることができました。

さあ、行ってわたしたちもその幼子を探そう。見出すことができるまで探そう。どこまでも探そう。そのような心で、そのような祈りを込めてこのミサをお捧げしたいと思います。クリスマスのこの時、特別に思い起こされる詩編の一句があります。「神を探し求めよ、どのような時も」。力強く、来られる救い主をお迎えするために、わたしたちも心を上に向けて背を伸ばして、わたしたちの中にいてくださる救い主をこの目で、信仰の目を開いて受け止めさせていたいただきたいと思います。主が共にいてくださることによって、この世の闇がど

のように深かろうと、そこに天からの光が差し込んでいます。わたしたちに光をもたらず救い主を喜びのうちにお迎えすることができますように。わたしたちも背を伸ばして、わたしたちと共にいてくださる救い主を信じるこの信仰によって、この世の中に、先の見えない暗闇にしっかりと立ち向かっていくことができますように。

このクリスマス、主の光を求めて共に歩んでまいりましょう。